

夏目漱石

二百十日





二  
百  
十  
日



## 一

ぶらりと両手を垂なげたまま、圭さんがどこからか帰つて来る。

「何所どこへ行つたね」

「一寸ちよつと、町を歩行あるいて来た」

「何か観みるものがあるかい」

「寺が一軒あつた」

「それから」

「銀杏いちようの樹が一本、門前にあつた」

「それから」

「銀杏の樹から本堂まで、一丁ちようはん半ばかり、石が敷き詰めてあつた。非常に細長い寺だつた」

「這はい入つて見たかい」

「やめて来た」

「その外ほかに何もなければね」

「別段何もない。一体、寺と云うものは大概たいがいの村にはあるね、君」

「そうさ、人間の死ぬ所には必ずある筈はずじゃないか」

「成程なるほどそうだね」と圭さん、首を捻ひねる。圭さんは時々妙な事に感心する。しばらくして、捻ひねった首を真直まっすぐにして、圭さんがこう云った。

「それから鍛冶屋かじやの前で、馬の脊くつを替える所を見て来たが実に巧みなものだね」

「どうも寺だけにしては、ちと、時間が長過ぎると思っ  
た。馬の脊くつがそんなに珍しいかい」

「珍らしくなくっても、見たのさ。君、あれに使う道具  
が幾通りあると思う」

「幾通りあるかな」

「あてて見給え」

「あてなくつても好いから教えるさ」

「何でも七つばかりある」

「そんなにあるかい。何と何だい」

「何と何だつて、慥たしかにあるんだよ。第一つめ爪をはがすのみ鑿

と、鑿たたをつち敲たたくつち槌つちと、それから爪を削けずるこ小こ刀がと、爪を刮な

るの妙のみなものと、それから……」

「それから何があるかい」

「それから変なものが、まだ色々あるんだよ。第一馬の



おとな  
大人しいには驚ろいた。あんなに、削られても、刳られ  
ても平気でいるぜ」

「爪だもの。人間だって、平気で爪を剪るじやないか」  
「人間はそうだが馬だぜ、君」

「馬だって、人間だって爪に变りはないやね。君は余っ  
程<sup>ほどのんき</sup>呑気だよ」

「呑気だから見ていたのさ。然し<sup>しか</sup>薄暗い所で赤い鉄を打  
つと奇麗だね。ぴちぴち火花が出る」

「出るさ、東京の真中<sup>まんなか</sup>でも出る」

「東京の真中でも出る事は出るが、感じが違うよ。こう

云う山の中の鍛冶屋は第一、音から違う。そら、此所<sup>ここ</sup>ま  
で聞えるぜ」

初秋<sup>はつあき</sup>の日脚は、うそ寒く、遠い国の方へ傾いて、淋し  
い山里の空気が、心細い夕暮れを促がすなかに、かあ  
んかあんと鉄を打つ音がする。

「聞えるだろう」と圭さんが云う。

「うん」と碌<sup>ろく</sup>さんは答えたぎり黙然<sup>もくねん</sup>としている。隣りの  
部屋で何だか二人しきりに話をしている。

「そこで、その、相手が竹刀<sup>しなたい</sup>を落したんだあね。すると、  
その、ちよいと、小手を取ったんだあね」

「ふうん。とうとう小手を取られたのかい」

「とうとう小手を取られたんだあね。ちよいと小手を取ったんだが、そこがそら、竹刀を落したものだから、どうにも、こうにも仕様がないやあね」

「ふうん。竹刀を落したのかい」

「竹刀は、そら、さつき、落してしまっただあね」

「竹刀を落してしまっただあね、小手を取られたら困るだらう」

「困らああね。竹刀も小手も取られたんだから」

二人の話しはどこまで行っても竹刀と小手で持ち切っ

ている。默然として、対坐していた圭さんと碌さんは顔を見合わして、にやりと笑った。

かあんかあんと鉄を打つ音が静かな村へ響き渡る。癩かん走った上に何だか心細い。

「まだ馬の脊を打ってる。何だか寒いね、君」と圭さんは白い浴衣ゆかたの下で堅くなる。碌さんも同じく白地の単衣ひとえの襟えりをかき合せて、だらしのない膝頭ひざがしらを行儀よく揃える。やがて圭さんが云う。

「僕の小供の時住んでた町の真中に、一軒豆腐屋とうふやがあつてね」

「豆腐屋があつて？」

「豆腐屋があつて、その豆腐屋の角から一丁ばかり爪先つまさき上がりあに上がると寒磬寺かんけいじと云う御寺があつてね」

「寒磬寺と云う御寺がある？」

「ある。今でもあるだろう。門前から見ると只大竹藪ただおおたけやぶばかり見えて、本堂も庫裏くりもない様ようだ。その御寺で毎朝四時頃になると、誰だか鉦かねを敲く」

「誰だか鉦を敲くつて、坊主が敲くんだらう」

「坊主だか何だか分らない。只竹の中でかんかんと幽かすかに敲くのさ。冬の朝なんぞ、霜が強く降つて、布団ふとんのな

かで世の中の寒さを一二寸の厚さに遮ぎさえって聞いていると、竹藪のなかから、かんかん響いてくる。誰が敲くのだか分らない。僕は寺の前を通る度に、長い石磴いしだたみと、倒れかかった山門と、山門を埋めうず尽くす程な大竹藪を見るのだが、一度も山門のなかを覗のぞいた事がない。只竹藪のなかで敲く鉦の音だけを聞いては、夜具うちの裏で海老えびの様になるのさ」

「海老の様になるって？」

「うん。海老の様になって、口のうちで、かんかん、かんかんと云うのさ」

「妙だね」

「すると、門前の豆腐屋がきつと起きて、雨戸を明ける。ぎつぎつと豆を臼うすで挽ひく音がする。ざあざあと豆腐の水を易かえる音がする」

「君の家は全体どこにある訳だね」

「僕のうちは、つまり、そんな音が聞える所にあるのさ」

「だから、何所どこにある訳だね」

「すぐ傍そばさ」

「豆腐屋の向むこうか、隣りかい」

「なに二階さ」

「どこの」

「豆腐屋の二階さ」

「へええ。そいつは……」と碌さん驚ろいた。

「僕は豆腐屋の子だよ」

「へええ。豆腐屋かい」と碌さんは再び驚ろいた。

「それから垣根の朝顔が、茶色に枯れて、引っ張るとがらがら鳴る時分、白い靄もやが一面に降りて、町の外はずれの瓦ガ斯燈スとうに灯ひがちらちらすると思うと又鉦が鳴る。かんかん竹の奥で冴さえて鳴る。それから門前の豆腐屋がこの鉦を



合函に、腰障子こししょうじをはめる」

「門前の豆腐屋と云うが、それが君のうちじやないか」

「僕のうち、即すなわち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。か

んかんと云う声を聞きながら僕は二階へ上がって布団を

敷ねいて寝る。——僕のうちの吉原揚よしわらあげは旨うまかった。近所で

評判だった」

隣り座敷の小手と竹刀は双方とも大人しくなつて、向

うの椽側えんがわでは、六十余りの肥った爺さんが、丸い脊せを柱

にもたして、胡坐あぐらのまま、毛けぬ抜きで顚あごの髯ひげを一本々々に

抜ぬいている。髯の根をうんと抑えて、ぐいと抜くと、毛

抜は下へ弾ね返り、顚は上へ反り返る。まるで器械の様に見える。

「あれは何日掛いくかったら抜けるだろう」と碌さんが圭さんに質問をかける。

「一生懸命にやったら半日位で済むだろう」

「そうは行くまい」と碌さんが反対する。

「そうかな。じゃ一日いちんちかな」

「一日いちんちや二日ふつかで奇麗に抜けるなら訳はない」

「そうさ、ことによると一週間もかかるかね。見給え、

あの丁寧ていねいに顚を撫なで廻しながら抜いてるのを」

「あれじゃ。古いのを抜いちまわないうちに、新しいのが生えるかも知れないね」

「とにかく痛い事だろう」と圭さんは話頭を転じた。

「痛いに違いないね。忠告してやろうか」

「なんて」

「よせってさ」

「余計な事だ。それより幾日いくか掛ったら、みんな抜けるか聞いて見ようじゃないか」

「うん、よかろう。君が聞くんだよ」

「僕はいやだ、君が聞くのさ」

「聞いても好いがつまらないじゃないか」

「だから、まあ、よそうよ」と圭さんは自己の申し出しを惜気もなく撤回した。

一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を、幾重いくえの稲妻に砕く積りか、かあんかあんと澄み切った空の底に響き渡る。

「あの音を聞くと、どうしても豆腐屋の昔が思い出される」と圭さんが腕組をしながら云う。

「全体豆腐屋の子がどうしても、そんなになつたもんだね」

「豆腐屋の子がどんなになつたのさ」

「だって豆腐屋らしくないじゃないか」

「豆腐屋だって、肴<sup>さかな</sup>屋<sup>や</sup>だって——なろうと思えば、何にでもなれるさ」

「そうさな、つまり頭だからね」

「頭ばかりじゃない。世の中には頭のいい豆腐屋が何人いるか分らない。それでも生涯豆腐屋さ。気の毒なものだ」

「それじゃ何だい」と碌さんが小供らしく質問する。

「何だって君、やっぱりなろうと思ふのさ」

「なろうと思っただって、世の中がしてくれないのが大分あるだろう」

「だから気の毒だと云うのさ。不公平な世の中に生れれば仕方がないから、世の中がしてくれなくても何でも、自分でなろうと思うのさ」

「思っで、なれなければ？」

「なれなくっても何でも思うんだ。思ってるうちに、世の中が、してくれる様になるんだ」と圭さんは横着を云う。

「そう注文通りに行けば結構だ。ハハハハ」

「だって僕は今日までそうして来たんだもの」

「だから君は豆腐屋らしくないと云うのだよ」

「これから先、又豆腐屋らしくなってしまうかも知れな  
いかな。厄介だな。ハハハハ」

「なったら、どうする積りだい」

「なれば世の中がわるいのさ。不公平な世の中を公平に  
してやろうと云うのに、世の中が云う事をきかなければ、  
向むこうの方が悪いのだろう」

「然し世の中も何だね、君、豆腐屋がえらくなる様な  
ら、自然えらい者が豆腐屋になる訳だね」

「えらい者た、どんな者だい」

「えらい者って云うのは、何さ。例えば華族とか金持とか云うものさ」と碌ささんはすぐ様さまえらい者を説明してしまふ。

「うん華族や金持か、ありや今でも豆腐屋じゃないか、君」

「その豆腐屋連が馬車へ乗ったり、別荘を建てたりして、自分だけの世の中の様な顔をしているから駄目だよ」  
「だから、そんなのは、本当の豆腐屋にしてしまふのさ」



「こつちがする気でも向がならないやね」

「ならないのをさせるから、世の中が公平になるんだよ」

「公平に出来れば結構だ。大いにやり給え」

「やり給えじゃいけない。君もやらなくつちあ。――」

只、馬車へ乗ったり、別荘を建てたりするだけならいいが、無暗むやみに人を圧逼あっぱくするぜ、ああ云う豆腐屋は。自分が豆腐屋の癖に」と圭さんはそろそろ慷慨こうがいし始める。

「君はそんな目に逢った事があるのかい」

圭さんは腕組をしたままふふんと云った。村鍛冶の音

は不相変あいかわらずかあんかあんと鳴る。

「まだ、かんかん遣やってる。——おい僕の腕は太いだろう」と圭さんは突然腕まくりをして、黒い奴を碌さんの前に押し付けた。

「君の腕は昔から太いよ。そうして、いやに黒いね。豆を磨ひいた事があるのかい」

「豆も磨いた、水も汲くんだ。——おい、君粗そこつ忽で人の足を踏んだらどっちが謝まるものだろう」

「踏んだ方が謝まるのが通則の様だな」

「突然、人の頭を張り付けたら？」

「そりや氣違だらう」

「氣狂なら謝まらないでもいいものかな」

「そうさな。謝まらさす事が出来れば、謝まらさす方がいいだらう」

「それを氣違の方で謝まれてって云うのは驚ろくじやないか」

「そんな氣違があるのかい」

「今の豆腐屋連はみんな、そう云う氣違ばかりだよ。人を圧迫した上に、人に頭を下げさせようとするんだぜ。本来なら向<sup>むこう</sup>が恐れ入るのが人間だらうじやないか、君」

「無論それが人間さ。然し気違の豆腐屋なら、うっちゃって置くより外に仕方があるまい」

圭さんは再びふふんと云った。しばらくして、

「そんな気違を増長させる位なら、世の中に生れて来ない方がいい」と独り言の様につけた。

村鍛冶の音は、会話が切れる度に静かな里の端はじから端までかあんかあんと響く。

「頻しきりにかんかんやるな。どうも、あの音は寒磬寺の鉦に似ている」

「妙に気に掛るんだね。その寒磬寺の鉦の音と、気違の

豆腐屋とでも何か関係があるのかい。——全体君が豆腐屋の俵せがれから、今日こんにちまでに変化した因縁はどう云う筋道なんだい。少し話して聞かせないか」

「聞かせてもいいが、何だか寒いじゃないか。ちよいと夕飯前ゆうめしまえに温泉ゆに這入はいろう。君いやか」

「うん這入ろう」

圭さんと碌さんは手拭をぶら下げて、庭へ降りる。棕しゆ栲緒ろおの貸下駄には都らしく宿の焼印が押してある。

## 二

「この湯は何に利くんだろう」と豆腐屋の圭さんが湯槽ゆぶねのなかで、ざぶざぶやりながら聞く。

「何に利くかなあ。分析表を見ると、何にでも利く様だ。

——君そんなに、臍へそばかりざぶざぶ洗ったって、出臍は癒なおらないぜ」

「純透明だね」と出臍の先生は、両手に温泉ゆを掬くんで、口へ入れてみる。やがて、

「味も何もない」と云いながら、流しへ吐き出した。

「飲んでもいいんだよ」と碌さんはがぶがぶ飲む。

圭さんは臍を洗うのをやめて、湯槽の縁へ肘をかけて漫然と、硝子越しに外を眺めている。碌さんは首だけ湯に漬かって、相手の臍から上を見上げた。

「どうも、いい体格だ。全く野生のままだね」

「豆腐屋出身だからなあ。体格が悪るいと華族や金持ちと喧嘩は出来ない。こっちは一人向は大勢だから」

「さも喧嘩の相手がある様な口振だね。当の敵は誰だ  
い」

「誰でも構わないさ」

「ハハハ呑気なもんだ。喧嘩にも強そうだが、足の強い  
のには驚いたよ。君と一所でなければ、きのう此処こゝまで  
くる勇氣はなかったよ。実は途中で御免蒙ごうむろうかと思  
った」

「実際少し気の毒だったね。あれでも僕は余程加減し  
て、歩行あゐいた積りだ」

「本当かい？ 果して本当ならえらいものだ。——何だ  
か怪しいな。すぐ付け上がるからいやだ」

「ハハハ付け上がるものか。付け上がるのは華族と金持



ばかりだ」

「又華族と金持ちか。眼の敵かたきだね」

「金はなくつても、此方こつちは天下の豆腐屋だ」

「そうだ、苟いやしくも天下の豆腐屋だ。野生の腕力家だ」

「君、あの窓の外に咲いている黄色い花は何だろう」  
碌ねさんは湯の中で首を振じ向ける。

「かぼちやさ」

「馬鹿あ云ってる。かぼちやは地の上を這ってるものだ。あれは竹へからまって、風呂場の屋根へあがっているぜ」

「屋根へ上がっちゃ、かぼちやになれないかな」

「だって可笑おかしいじゃないか、今頃花が咲くのは」

「構うものかね、可笑しいたって、屋根にかぼちやの花が咲くさ」

「そりや唄かい」

「そうさな、前半ぜんぱんは唄の積りでもなかつたんだが、後半に至って、つい唄になっちゃってしまった様だ」

「屋根にかぼちやが生なる様だから、豆腐屋が馬車なんかへ乗るんだ。不都合千万だよ」

「又こゝろ慷慨か、こんな山の中へ来て慷慨したって始まらな

いさ。それより早く阿蘇<sup>あそ</sup>へ登って噴火口から、赤い岩が飛び出す所でも見るさ。——然し飛び込んじや困るぜ。

——何だか少し心配だな」

「噴火口は実際猛烈なものだろうな。何でも、沢庵石<sup>たくあんいし</sup>の様な岩が真赤になって、空の中へ吹き出すそうだけ。それが三四町四方一面に吹き出すのだから壮<sup>さか</sup>んに違ない。

——あしたは早く起きなくっちゃ、いけないよ」

「うん、起きる事は起きるが山へかかってから、あんなに早く歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>いちゃ、御免だ」と碌さんはすぐ予防線を張った。

「ともかくも六時に起きて……」

「六時に起きる？」

「六時に起きて、七時半に湯から出て、八時に飯を食つて、八時半に便所から出て、そうして宿を出て、十一時に阿蘇神社へ参詣さんけいして、十二時から登るのだ」

「へえ、誰が」

「僕と君がさ」

「何だか君一人ひとりで登る様だぜ」

「なに構わない」

「難ありがた有しあわい仕合せだ。まるで御供の様だね」

「うふん。時に昼は何を食うかな。やっぱり餛飩うどんにして置くか」と圭さんが、あすの昼飯の相談をする。

「餛飩はよすよ。ここいらの餛飩はまるで杉箸すぎばしを食う様で腹が突張ってたまらない」

「では蕎麦そばか」

「蕎麦も御免だ。僕は麵類めんるいじゃ、とても凌しのげない男だから」

「じゃ何を食う積つもりだい」

「何でも御馳走が食いたい」

「阿蘇の山の中に御馳走がある筈はずがないよ。だからこの

際、ともかくも饅飩で間に合せて置いて……」

「この際は少し変だぜ。この際た、どんな際なんだい」  
「剛健な趣味を養成する為めの旅行だから……」

「そんな旅行なのかい。ちつとも知らなかったぜ。剛健  
はいいが饅飩は平ひらに不賛成だ。こう見えても僕は身分が  
好いんだからね」

「だから柔弱にゆうじやくでいけない。僕なぞは学資に窮した  
時、一日に白米二合で間に合せた事がある」

「瘦やせたらう」と碌さんが気の毒な事を聞く。

「そんなに痩せもしなかったが只虱しらみが湧わいたには困つ

た。——君、虱が湧いた事があるかい」

「僕はないよ。身分が違わあ」

「まあ経験して見給え。そりや容易に獮<sup>か</sup>り尽せるもんじやないぜ」

「煮え湯で洗濯したらよかろう」

「煮え湯？ 煮え湯ならいいかも知れない。然し洗濯するにしても只では出来ないからな」

「なある程、銭<sup>ぜに</sup>が一<sup>もん</sup>文もないんだね」

「一文もないのさ」

「君どうした」

「仕方がないから、襯衣シヤツを敷居の上へ乗せて、手頃な丸い石を拾って来て、こつこつ叩いた。そうしたら虱が死なないうちに、襯衣が破れてしまった」

「おやおや」

「しかもそれを宿のかみさんが見付けて、僕に退去を命じた」

「さぞ困ったろうね」

「なあに困らんさ、そんな事で困っちゃ、今日まで生きていられるものか。これから追ひ追ひ華族や金持ちを豆腐屋にするんだからな。めったに困っちゃ仕方がない」



「すると僕なんぞも、今に、とおふい、油揚、がんもどきと怒鳴って、あるかなくつちやならないかね」

「華族でもない癖に」

「まだ華族にはならないが、金は大分あるよ」

「あってもその位じゃ駄目だ」

「この位じゃ豆腐いと云う資格はないのかな。大おおに僕の

財産を見縊みくびったね」

「時に君、脊中せなかを流してくれないか」

「僕のも流すのかい」

「流してもいいさ。隣りの部屋の男も流しくらをやって

たぜ、君」

「隣りの男の脊中は似たり寄つたりだから公平だが、君の脊中と、僕の脊中とは大分面積が違ふから損だ」

「そんな面倒な事を云うなら一人で洗うばかりだ」と圭さんは、両足を湯壺の中にうんと踏ん張って、ぎうと手拭をしごいたと思つたら、りようはじ両端を握つたまま、ぴしやりと、音を立ててはす斜にあぶらぎ膏切つた脊中へ宛てがった。やがて二の腕へ力瘤が急ちからこぶに出来上がると、水を含んだ手拭は、岡の様に肉づいた脊中をこすぎちぎち磨り始める。

手拭の運動につれて、圭さんの太い眉がくしやりと寄

って来る。鼻の穴が三角形に膨脹して、小鼻が勃ぼつとして左右に展開する。口は腹を切る時の様に堅く喰くい締しばったまま、両耳の方まで割けてくる。

「まるで仁王におうの様だね。仁王の行水だ。そんな猛烈な顔がよく出来るね。こりや不思議だ。そう眼をぐりぐりさせなくっても、脊中は洗えそうなものだがね」

圭さんは何なんにも云わずに一生懸命にぐいぐい擦こする。擦って時々、手拭を温泉ゆに漬けて、充分水を含ませる。含ませるたんびに、碌さんの顔へ、汗と膏あぶらと垢あかと温泉ゆの交ったものが十五六滴ずつ飛んで来る。

「こいつは降参だ。ちよつと失敬して、流しの方へ出るよ」と碌さんは湯槽を飛びだした。飛び出しはしたものの、感心の極きよく、流しへ突つ立つたまま、茫然として、仁王の行水を眺めている。

「あの隣りの客は元来何者だろう」と圭さんが槽ふねのなかから質問する。

「隣りの客どころじゃない。その顔は不思議だよ」

「もう済んだ。ああ好い心持だ」と圭さん、手拭の一端を放すや否や、ざぶんと温泉ゆの中へ、石の様に大きな脊中を落す。満槽まんそうの湯は一度に面喰つて、槽ふねの底から大だい

恐惶きょうこうを持ち上げる。ざあっざあつと音がして、流しへ溢あふれだす。

「ああいい心持ちだ」と圭さんは波のなかで云った。

「成程なるほどそう遠慮なしに振舞ったら、好い心持ちに相違ない。君は豪傑だよ」

「あの隣りの客は竹刀と小手の事ばかり云ってるじゃないか。全体何者だい」と圭さんは呑気なものだ。

「君が華族と金持ちの事を気にする様なものだろう」

「僕のは深い原因があるのだが、あの客のは何だか訳が分らない」

「なに自分じあ、あれで分ってるんだよ。——そこでその小手を取られたんだあね——」と碌さんが隣りの真似をする。

「ハハハハそこでそら竹刀を落したんだあねか。ハハハハ。どうも気楽なものだ」と圭さんも真似してみる。

「なにあれでも、実は慷慨家かも知れない。そらよく草双紙にあるじゃないか。何とかの何々、実は海賊の張本毛剃九右衛門て」

「海賊らしくもないぜ。さつき温泉ゆに這入りに来る時、覗のぞいてみたら、二人共木枕ねをして、ぐうぐう寐ねていたよ」

「木枕をして寐られる位の頭だから、そら、そこで、その、小手を取られるんだあね」と碌さんは、まだ真似をする。

「竹刀も取られるんだあねか。ハハハハ。何でも赤い表紙の本を胸の上へ載せたまんま寐ていたよ」

「その赤い本が、何でもその、竹刀を落したり、小手を取られるんだあね」と碌さんは、どこまでも真似をする。

「何だろう、あの本は」

「伊賀いがの水月すいげつさ」と碌さんは、躊躇ちゆうちよなく答えた。

「伊賀の水月？　伊賀の水月た何だい」

「伊賀の水月を知らないのかい」

「知らない。知らなければ耻はじかな」と圭さんは一寸首を捻ひねった。

「耻じやないが話せないよ」

「話せない？ なぜ」

「なぜって、君、荒木あらかき又右衛門またえもんを知らないか」

「うん、又右衛門か」

「知ってるのかい」と碌さん又湯の中へ這入る。圭さんは又槽ふねのなかへ突立った。

「もう仁王におうの行水は御免だよ」



「もう大丈夫、脊中はあらわれない。あまり這入つてると逆上のぼせるから、時々こう立つのさ」

「只立つばかりなら、安心だ。——それで、その、荒木又右衛門を知つてるかい」

「又右衛門？　そうさ、どこかで聞いた様だね。豊臣秀吉の家来けらいじゃないか」と圭さん、飛んでもない事を云う。

「ハハハハこいつはあきれた。華族や金持ちを豆腐屋にするんだなんて、えらい事を云うが、どうも何なんにも知らないね」

「じゃ待った。少し考えるから。又右衛門だね。又右衛

門、荒木又右衛門だね。待ち給えよ、荒木の又右衛門と。  
うん分った」

「何だい」

「相撲取だ」

「ハハハハ荒木、ハハハハ荒木、又ハハハハ又右衛門  
が、相撲取り。愈いよいよ、あきれてしまった。実に無識むしきだね。  
ハハハハ」と碌さんは大恐悦である。

「そんなに可笑しいか」

「可笑しいって、誰に聞かしたって笑うぜ」

「そんなに有名な男か」

「そうさ、荒木又右衛門じゃないか」

「だから僕もどこかで聞いた様に思うのさ」

「そら、落ち行く先きは九州相良さがらって云うじゃないか」

「云うかも知れんが、その句は聞いた事がない様だ」

「困った男だな」

「ちつとも困りやしない。荒木又右衛門位知らなくった  
って、毫ごうも僕の人格には関係はしまい。それよりも五里  
の山路が苦になって、やたらに不平を並べる様な人が困  
った男なんだ」

「腕力や脚力を持ち出されちや駄目だね。到底叶いっこ

ない。そこへ行くと、どうしても豆腐屋出身の天下だ。

僕も豆腐屋へ年期奉公に住み込んで置けばよかった」

「君は第一平生から惰弱だじやくでいけない。ちつとも意志がない」

「これで余よっ程ほど有る積りなんだがな。唯饅飩ぼうとうに逢った時ばかりは全く意志が薄弱だと、自分ながら思うね」

「ハハハハつまらん事を云っていらあ」

「然し豆腐屋にしちや、君のからだは奇麗過ぎるね」

「こんなに黒くってもかい」

「黒い白いは別として、豆腐屋は大概筍青ほりものがあるじやな

いか」

「なぜ」

「なぜか知らないが、ほりもの筍青があるもんだよ。君、なぜほ  
らなかつた」

「馬鹿あ云ってらあ。僕のような高尚な男が、そんな愚な  
真似をするものか。華族や金持がほれば似合うかも知れ  
ないが、僕にはそんなものは向かない。荒木又右衛門だ  
って、ほっちやいまい」

「荒木又右衛門か。そいつは困ったな。まだそこまでは  
調べが届いていないからね」

「そりやどうでもいいが、ともかくもあしたは六時に起きるんだよ」

「そうして、ともかくも饅頭を食うんだろう。僕の意志の薄弱なのにも困るかも知れないが、君の意志の強固なのにも辟易へきえきするよ。うちを出てから、僕の云う事は一つも通らないんだからな。全く唯々いいたくたく諾々として命令に服しているんだ。豆腐屋主義はきびしいもんだね」

「なにこの位強硬にしないと増長していけない」  
「僕がかい」

「なあに世の中の奴等がさ。金持ちとか、華族とか、何

とかかとか、生意気に威張る奴等がさ」

「然しそりや見当違だぜ。そんなものの身代りに僕が豆腐屋主義に屈従するなたまらない。どうも驚ろいた。以来君と旅行するのは御免だ」

「なあに構わんさ」

「君は構わなくつてもこっちは大いに構うんだよ。その上旅費は奇麗に折半されるんだから愚の極きよくだ」

「然し僕の御蔭で天地の壯観たる阿蘇の噴火口を見る事が出来るだろう」

「可愛想に。一人だって阿蘇位登れるよ」

「然し華族や金持なんて存外意気地がないもんで……」

「又身代りか、どうだい身代りはやめにして、本当の華族や金持ちの方へ持って行ったら」

「いずれ、その内持つてく積りだがね。——意気地がなくって、理窟りくつがわからなくって、個人としちあ三文の価値もないもんだ」

「だから、どしどし豆腐屋にしてしまおうさ」

「その内、してやろうと思ってるのさ」

「思ってるだけじゃ劔吞けんどんなものだ」

「なあに年が年中思っていりや、どうにかなるもんだ」



「随分気が長いね。尤も僕もっとの知ったものにね。虎列拉コレラになるなると思っていたら、とうとう虎列拉になったものがあるがね。君のもそう、うまく行くと好いけれども」

「時にあの髯を抜いてた爺さんが手拭をさげてやって来たぜ」

「丁度好いから君一つ聞いて見給え」

「僕はもう湯気に上がりそうだから、出るよ」

「まあ、いいさ、出ないでも。君がいやなら僕が聞いてみるから、もう少し這入っていたまえ」

「おや、あとから竹刀と小手が一所に来たぜ」

「どれ。成程、揃って来た。あとから、まだ来るぜ。やあ婆さんが来た。婆さんも、この湯槽へ這入るのかな」

「僕はともかくも出るよ」

「婆さんが這入るなら、僕もともかくも出よう」

風呂場を出ると、ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと這入って、素肌を臍のあたりまで吹き抜けた。出臍の圭さんは、はつくししようと大きな苦沙弥くしゃみを無遠慮にやる。上がり口に白芙蓉はくふようが五六輪、夕暮の秋を淋しく咲いている。見上げる向むこうでは阿蘇の山がごうごうと遠くながら鳴っている。

「あすこへ登るんだね」と碌さんが云う。  
「鳴ってるぜ。愉快だな」と圭さんが云う。

## 三

「姉さん、この人は肥ふとってるだろう」

「大分肥えていなはります」

「肥えてるって、おれは、これで豆腐屋だもの」

「ホホホ」

「豆腐屋じゃ可笑おかしいかい」

「豆腐屋の癖に西郷隆盛の様な顔をしているから可笑しいんだよ。時にこう、精進料理じゃ、あした、御山へ登れそうもないな」

「又御馳走を食いたがる」

「食いたがるって、これじゃ營養不良になるばかりだ」

「なにこれ程御馳走があれば沢山だ。——湯葉ゆばに、椎茸しいたけに、芋に、豆腐、色々あるじゃないか」

「色々ある事はあるがね。ある事は君の商買道具まであるんだが——困ったな。昨日は饅頭ばかり食わせられる。きょうは湯葉に椎茸ばかりか。ああああ」

「君この芋を食って見給え。掘りたてで頗るすこぶ美味だ」

「頗る剛健な味がしやしないか——おい姉さん、肴さかなは

何もないのかい」

「生憎あいにく何も御座りまつせん」

「御座りまつせんは弱ったな。じゃ玉子があるだろう」

「玉子なら御座りまつす」

「その玉子を半熟にして来てくれ」

「何に致します」

「半熟にするんだ」

「煮て参じますか」

「まあ煮るんだが、半分煮るんだ。半熟を知らないか」

「いいえ」

「知らない？」

「知りません」

「どうも辟易だな」

「何で御座りまっす」

「何でもいいから、玉子を持って御出<sup>おいで</sup>。それから、おい、ちよつと待った。——君ビールを飲むか」

「飲んでもいい」と圭さんは泰然たる返事をした。

「飲んでもいいか、それじゃ飲まなくってもいいんだ。」

——よすかね」

「よさなくつても好い。ともかくも少し飲もう」

「ともかくもか、ハハハハ。君程、ともかくもの好きな男はないね。それで、あしたになると、ともかくも饅頭を食おうと云うんだろう。——姉さん、ビールも序でに持ってくるんだ。玉子とビールだ。分つたろうね」

「ビールは御座りまっせん」

「ビールがない？——君ビールはないとさ。何だか日本の領地でない様な気がする。情ない所だ」

「なければ、飲まなくつても、いいさ」と圭さんは又泰

然たる挨拶をする。

「ビールは御座りませんばってん、えびす恵比寿なら御座ります」

「ハハハハいよいよ愈妙になつて来た。おい君ビールでない恵比寿があるつて云うんだが、その恵比寿でも飲んでみるかね」

「うん、飲んでもいい。——その恵比寿はやつぱりびん罎びんに這入ってるんだらうね、姉さん」と圭さんはこの時ようや漸ようやく下女に話しかけた。

「ねえ」と下女は肥ひ後ご訛なまりの返事をする。



「じゃ、ともかくもその栓せんを抜いてね。鑿くわごと、ここへ持って御出」

「ねえ」

下女は心こころ得え貌がに起たつて行く。幅の狭い唐縮緬とうちりめんをちよきり結びに御臀おしりの上へ乗せて、緋かすりの筒袖をつんつるてんに着ている。髪だけは一種異様の束髪そくはつに、大分碌さんと圭さんの胆たんを寒からしめた様だ。

「あの下女は異彩を放ってるね」と碌さんが云うと、圭さんは平気な顔をして、

「そうさ」と何の苦もなく答えたが、

「単純でいい女だ」とあとへ、持って来て、木に竹を接いだ様につけた。

「剛健な趣味がありやしないか」

「うん。実際田舎者の精神に、文明の教育を施すと、立派な人物が出来るんだがな。惜しい事だ」

「そんなに惜しけりや、あれを東京へ連れて行って、仕込んでみるがいい」

「うん、それも好かろう。然しそれより前に文明の皮を剥かなくっちゃ、いけない」

「皮が厚いから中々骨が折れるだろう」と碌さんは水瓜

の様な事を云う。

「折れても何でも剥くのさ。奇麗きれいな顔をして、下卑げびた事ばかりやってる。それも金がない奴だと、自分だけで済むのだが、身分がいいと困る。下卑た根性を社会全体に蔓延まんえんさせるからね。大変な害毒だ。しかも身分がよかつたり、金があつたりするものに、よくこう云う性根しょうねの悪い奴があるものだ」

「しかも、そんなのに限って皮が愈いよいよ厚いんだろう」  
 「体裁だけは頗すこぶる美事なものさ。然し内心はあの下女より余つ程すれているんだから、いやになつてしまふ」

「そうかね。じゃ、僕もこれから、ちと剛健党の御仲間入りをやろうかな」

「無論の事さ。だから先ず第一着だいいっちやくにあした六時に起きて……」

「御昼に餛飩を食ってか」

「阿蘇あその噴火口を観て……」

「癩癩かんしゃくを起して飛び込まない様に要心をしてか」  
もつと

「尤も崇高なる天地間の活力現象に対して、雄大の氣象を養って、齷齪あくそくたる塵事じんじを超越するんだ」

「あんまり超越し過ぎるとあとで世の中が、いやになっ

て、却って困るぜ。だからその所は好加減に超越して置く事にしようじゃないか。僕の足じや到底そうえらく超越出来そうもないよ」

「弱い男だ」

筒袖の下女が、盆の上へ、麦酒ビールを一本、洋盃コップを二つ、玉子を四個、並べつくして持ってくる。

「そら恵比寿が来た。この恵比寿がビールでないんだから面白い。さあ一杯飲むかい」と碌さんが相手に洋盃を渡す。

「うん、序ついでにその玉子を二つ貰おうか」と圭さんが云

う。

「だって玉子は僕が誂あつらえたんだぜ」

「然し四つとも食う気かい」

「あしたの饅飩が気になるから、このうち二個は携帯して行こうと思うんだ」

「うん、そんなら、よそう」と圭さんはすぐ断念する。

「よすとなると気の毒だから、まあ上げよう。本来なら剛健党が玉子なんぞを食うのは、ちと贅ぜいたく沢の沙汰さただが、可哀想でもあるから、——さあ食うがいい。——姉さん、この恵比寿はどこで出来るんだね」

「大方熊本で御座りまっしょ」

「ふん、熊本製の恵比寿か、中々旨いや。君どうだ、熊本製の恵比寿は」

「うん。やっぱり東京製と同じ様だ。——おい、姉さん、恵比寿はいいが、この玉子は生だぜ」と玉子を割った圭さんは一寸眉をひそめた。

「ねえ」

「生だと云うのに」

「ねえ」

「何だか要領を得ないな。君、半熟を命じたんじゃない

か。君のも生か」と圭さんは下女を捨てて、碌さんに向  
つてくる。

「半熟を命じて不熟を得たりか。僕のを一つ割ってみよ  
う。——おやこれは駄目だ……」

「うで玉子か」と圭さんは首を延して相手の膳の上を見  
る。

「全熟だ。こっちはどうだ。——うん、これも全熟だ。

——姉さん、これは、うで玉子じゃないか」

と今度は碌さんが下女にむかう。

「ねえ」



「そうなのか」

「ねえ」

「なんだか言葉の通じない国へ来た様だな。——向うの御客さんのが生玉子で、おれのは、うで玉子なのかい」

「ねえ」

「なぜ、そんな事をしたのだい」

「半分煮<sup>に</sup>て参じました」

「なある程。こりや、よく出来てらあ。ハハハハ、君、半熟のいわれが分ったか」と碌さん横手を打つ。

「ハハハハ単純なものだ」

「まるで落し噺ばなしみた様だ」

「間違いましたか。そちらのも煮て参じますか」

「なにこれでいいよ。——姉さん、ここから、阿蘇まで何里あるかい」と圭さんが玉子に関係のない方面へ出て来た。

「ここが阿蘇で御座りまっす」

「ここが阿蘇なら、あした六時に起きるがものはない。

もう二三日逗留にさんちとうりゆうして、すぐ熊本へ引き返そうじやないか」と碌さんがすぐ云う。

「どうぞ、何時いつまでも御逗留いっせなさいまっせ」

「折角<sup>せっかく</sup>、姉さんも、ああ云って勧めるものだから、どうだろう、いつそ、そうしたら」と碌さんが圭さんの方を向く。圭さんは相手にしない。

「ここも阿蘇だって、阿蘇郡なんだろう」とやはり下女を追窮している。

「ねえ」

「じゃ阿蘇の御宮<sup>おみや</sup>まではどの位あるかい」

「御宮までは三里で御座りまっす」

「山の上までは」

「御宮から二里で御座りますすたい」

「山の上はえらいだろうね」と碌さんが突然飛び出してくる。

「ねえ」

「御前登おまえった事があるかい」

「いいえ」

「じゃ知らないんだね」

「いいえ、知りません」

「知らなけりや、仕様がな。折角話を聞こうと思ったのに」

「御山へ御登りなさいますか」

「うん、早く登りたくって、仕方がないんだ」と圭さんが云うと、

「僕は登りたくなくって、仕方がないんだ」と碌さんが打ち壊ぶわした。

「ホホホそれじゃ、あなただけ、ここへ御逗留こなさいまっせ」

「うん、ここで寐ね転ころんで、あのごうごう云う音を聞いている方が楽な様だ。ごうごうと云やあ、さつきより、大分ぶん烈れつしくなった様だぜ、君」

「そうさ、大分、強つよくなった。夜の所せ為いだらう」

「御山が少し荒れておりますたい」

「荒れると烈しく鳴るのかね」

「ねえ。そうしてよなが沢山に降って参りますたい」

「よなた何だい」

「灰で御座りまっす」

下女は障子をあけて、椽側へ人指しゆびを擦りつけながら、

「御覧なさりまっせ」と黒い指先を出す。

「成程、始終降ってるんだ。きのうは、こんなじやなかったね」と圭さんが感心する。

「ねえ。少し御山が荒れておりますたい」

「おい君、いくら荒れても登る気かね。荒れ模様なら少々延ばそうじやないか」

「荒れれば猶<sup>なお</sup>愉快だ。めったに荒れた所なんぞが見られるものじやない。荒れる時と、荒れない時は火の出具合が大変違うんだそうだ。ねえ、姉さん」

「ねえ、今夜は大変赤く見えます。ちよと出て御覧なさいまっせ」

どれと、圭さんはすぐ椽側へ飛び出す。

「いやあ、こいつは熾<sup>さかん</sup>だ。おい君早く出て見給え。大

変だよ」

「大変だ？　大変じゃ出てみるかな。どれ。——いやあ、こいつは——成程えらいものだね——あれじゃ到底駄目だ」

「何が」

「何がって、——登る途中で焼き殺されちまうだろう」

「馬鹿を云っていらあ。夜だから、ああ見えるんだ。実際昼間から、あの位やってるんだよ。ねえ、姉さん」

「ねえ」

「ねえかも知れないが危険だぜ。ここにこうしていても



何だか顔が熱い様だ」と碌さんは、自分の頬ぺたを撫なで廻す。

「大袈裟おおげさな事ばかり云う男だ」

「だって君の顔だって、赤く見えるぜ。そらそこの垣の外に広い稲田があるだろう。あの青い葉が一面に、こう照らされているじゃないか」

「嘘ばかり、あれは星のひかりで見えるのだ」

「星のひかりと火のひかりとは趣が違うさ」

「どうも、君も余程無学だね。君、あの火は五六里先きにあるのだぜ」

「何里先きだつて、向うの方の空が一面に真赤になつて  
るじゃないか」と碌さんは向むこうをゆびさして大きな輪を  
指の先で描いて見せる。

「よるなもの」

「夜だつて……」

「君は無学だよ。荒木又右衛門は知らなくつても好い  
が、この位な事が分らなくつちや耻はじだぜ」と圭さんは、  
横から相手の顔を見た。

「人格にかかわるかね。人格にかかわるのは我慢する  
が、命にかかわつちや降参だ」

「まだあんな事を云っている。——じゃ姉さんに聞いてみるがいい。ねえ姉さん。あの位火が出たって、御山へは登れるんだろう」

「ねえい」

「大丈夫かい」と碌さんは下女の顔を覗のぞき込む。

「ねえい。女でも登りますたい」

「女でも登っちゃ、男は是非登る訳かな。飛んだ事になったもんだ」

「ともかくも、あしたは六時に起きて……」  
「もう分ったよ」

言い棄てて、部屋のなかに、ごろりと寐転んだ、碌さんの去ったあとに、圭さんは、默然と、もくねん眉を軒あげて、奈落から半空はんくうに向って、真直に立つ火の柱を見詰めていた。

## 四

「おいこれから曲がって愈いよいよ登るんだろう」と圭さんが振り返る。

「ここを曲がるかね」

「何でも突き当りに寺の石段が見えるから、門を這は入いら

ずに左へ廻れと教えたぜ」

「饅頭屋の爺さんがか」と碌さんはしきりに胸を撫なで廻す。

「そうさ」

「あの爺さんが、何を云うか分ったもんじやない」

「何故なぜ」

「何故って、世の中に商買もあるうに、饅頭屋になるなんて、第一それからが不ふ了り簡ようだ」

「饅頭屋だって正業だ。金を積んで、貧乏人を圧迫するのを道楽にする様な人間より遥はるかに尊たつといさ」

「尊といかも知れないが、どうも饅飩屋は性しやうに合わな  
い。——然し、とうとう饅飩を食わせられた今となつて  
みると、いくら饅飩屋の亭主を恨んでも後あとの祭りだから、  
まあ、我慢して、ここから曲がつてやろう」

「石段は見えるが、あれが寺かなあ、本堂も何もな  
いぜ」

「阿蘇あその火で焼けちまつたんだらう。だから云わない事  
じゃない。——おい天気が少々劔呑けんのおんになつて来たぜ」

「なに、大丈夫だ。天祐てんゆうがあるんだから」  
「どこに」

「どこにでもあるさ。意思のある所には天祐がごろごろしているものだ」

「どうも君は自信家だ。剛健党ごうけんとうになるかと思うと、天祐派になる。この次ぎには天誅組てんちゆうぐみにでもなつて筑波山つくばさんへ立て籠こもる積りだろう」

「なに豆腐屋時代から天誅組さ。——貧乏人をいじめる様な——豆腐屋だって人間だ——いじめるって、何等の利害もないんだぜ、只道楽なんだから驚ろく」

「いつそんな目に逢つたんだい」

「いつでもいいさ。桀紂けつちゆうと云えば古来から悪人として

通り者だが、二十世紀はこの桀紂けつちゆうで充満しているんだぜ。しかも文明の皮を厚く被かぶっているから小憎らしい」

「皮ばかりで中味のない方がいい位なものかな。やっばり、金があり過ぎて、退屈だと、そんな真似がしたくないんだね。馬鹿に金を持たせると大概桀紂になりたがるんだろう。僕のような有徳うとくの君子は貧乏だし、彼等の様な愚劣な輩はいは、人を苦しめるために金銭を使っているし、困った世の中だなあ。いっそ、どうだい、そう云う、ももんがをあを十把じっぱ一ひとからげにして、阿蘇の噴火口から真まっ逆さかさま様に地獄の下へ落としちまったら」



「今に落としてやる」と圭さんは薄黒く渦巻く烟りを仰いで、草鞋足をうんと踏張った。

「大変な権幕だね。君、大丈夫かい。十把一とからげを放り込まないうちに、君が飛び込んじやいけないぜ」

「あの音は壮烈だな」

「足の下が、もう揺れている様だ。——おい一寸、地面へ耳をつけて聞いて見給え」

「どんなだい」

「非常な音だ。慥かに足の下がうなってる」

「その割に烟りがこないな」

「風の所せ為いだ。北風だから、右へ吹きつけるんだ」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登ったら見当がつくだろう」

しばらくは雑木林の間に行く。道幅は三尺に足らぬ。

いくら仲が善くても並んで歩あ行くる訳には行かぬ。圭さん

は大きな足を悠々と振って先へ行く。碌さんは小さな

体か軀らをすぼめて、小こ股またに後あから尾ついて行く。尾ついて行き

ながら、圭さんの足跡の大きいのに感心している。感心

しながら歩あ行るいて行くと、段々おくれてしまう。

路は左右に曲折して爪つ先ま上さりあだから、三十分と立たぬ

うちに、圭さんの影を見失った。樹と樹の間をすかして見ても何にも見えぬ。山を下りる人は一人もない。上るものにも全く出合わない。只所々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切れが茨いばらにかかっている。その外に人の気色は更にならない、饑餓腹の碌さんは少々心細くなった。

きのうの澄み切った空に引き易かえて、今朝宿を立つ時からの霧模様には少し掛念けねんもあつたが、晴れさえすればと、好い加減な事を頼みにして、とうとう阿蘇の社やしろまでは漕ぎ付けた。白木しらぎの宮に禰宜ねぎの鳴らす柏手かしわでが、森閑と立つ杉の梢こずえに響いた時、見上げる空から、ぽつり

と何やら額に落ちた。饅頭を煮る湯気が障子の破れから、吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思われた。

雑木林を小半里程来たたら、怪しい空がとうとう持ち切れなくなったとみえて、梢にしたたる雨の音が、さあと北の方へ走る。あとから、すぐ新しい音が耳を掠めて、<sup>ひるが</sup>翻える木の葉と共に又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、えっと舌打ちをした。

一時間程で林は尽きる。尽きると云わんよりは、一度に消えると云う方が適当であろう。ふり返る、後は知<sup>うしろ</sup>

らず、貫いて来た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打って幾段となく連なる後から、むくむくと黒い烟りが持ち上がってくる。噴火口こそ見えないが、烟りの出るのは、つい鼻の先である。

林が尽きて、青い原を半丁はんちようと行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立っている。蝙蝠傘こうもりは畳んだまま、帽子さえ、被かぶらずに毬栗頭いがぐりあたまをぬつくと草から上へ突き出して地形を見廻している様子だ。

「おうい。少し待ってくれ」

「おうい。荒れて来たぞ。荒れて来たぞうう。しっかり

しろう」

「しつかりするから、少し待ってくれえ」と碌さんは一  
生懸命に草のなかを這い上がる。漸ようやく追いつく碌さん  
を待ち受けて、

「おい何を愚図々々しているんだ」と圭さんが遣やっつけ  
る。

「だから饅飩じや駄目だと云ったんだ。ああ苦し  
い。——おい君の顔はどうしたんだ。真黒だ」

「そうか、君のも真黒だ」

圭さんは、無雑作に白地の浴衣ゆかたの片袖で、頭から顔を

撫で廻す。碌さんは腰から、ハンケチを出す。

「なる程、拭くと、着物がどす黒くなる」

「僕のハンケチも、こんなだ」

「ひどいものだな」と圭さんは雨のなかに坊主頭を曝さらしながら、空模様を見廻す。

「よなだ。よなが雨に溶けて降ってくるんだ。そら、その薄すすきの上を見給え」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて濡れながら、靡なびく。

「成程」

「困ったな、こりや」

「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの烟りの出る所を目当にして行けば訳はない」

「訳はなさそうだが、これじゃ路が分らないぜ」

「だから、さつきから、待っていたのさ。ここを左りへ行くか、右へ行くかと云う、丁度股またの所なんだ」

「成程、両方共路になつてるね。——然し烟りの見当から云うと、左りへ曲がる方がよさそうだ」

「君はそう思うか。僕は右へ行く積りだ」

「どうして」

「どうしてって、右の方には馬の足跡があるが、左の方



には少しもない」

「そうかい」と碌さんは、からだ身軀を前に曲げながら、おお蔽いかかる草を押し分けて、五六歩、左の方へ進んだが、すぐに取り返して、

「駄目の様だ。足跡は一つも見当らない」と云った。

「ないだろう」

「そつちにはあるかい」

「うん。たった二つある」

「二つぎりかい」

「そうさ。たった二つだ。そら、此所と此所に」と圭さ

んは繻子張しゆすばりの蝙蝠傘こうもりの先で、かぶさる薄の下に、幽かすかに残る馬の足跡を見せる。

「これだけかい心細いな」

「なに大丈夫だ」

「天祐じゃないか、君の天祐はあてにならない事おびただ夥し  
いよ」

「なにこれが天祐さ」と圭さんが云い了らぬうちに、雨を捲さっいて颯さつとおろす一陣の風が、碌ろくさんの麦藁帽むぎわらぼうを遠慮なく、吹き込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に余る青草は、風を受けて一度に向うへ靡いて、見るうちに

色が変わると思うと、又靡き返して故の態もとさまに戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給え」と圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んじまった」

「帽子が飛んだ？ いいじゃないか帽子が飛んだって。取ってくるさ。取って来てやろうか」

圭さんは、いきなり、自分の帽子の上へ蝙蝠傘こうもりを重しに置いて、颯と、薄の中に飛び込んだ。

「おいこの見当か」

「もう少し左りだ」

圭さんの身躯は次第に青いものの中に、深くはまって行く。しまいには首だけになった。あとに残った碌さんは又心配になる。

「おうい。大丈夫か」

「何だあ」と向うの首から声が出る。

「大丈夫かよう」

やがて圭さんの首が見えなくなった。

「おうい」

鼻の先から出る黒煙りは鼠色のまるま円柱ぼしの各部が絶間な

く蠕動ぜんどうを起しつつある如ごとく、むくむくと捲き上がって、  
 半空はんくうから大氣うちの裡うちに溶け込んで碌さんの頭の上へ容赦ようしやな  
 く雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然しやうぜんとして、首の消  
 えた方角を見詰めている。

暫しばらくすると、まるで見当の違つた半丁程先きに、圭  
 さんの首が忽然こつぜんと現われた。

「帽子はないぞう」

「帽子は入らないよう。早く歸つてこようい」

圭さんは坊主頭を振り立てながら、薄すすぎの中を泳いで  
 くる。

「おい、何処どこへ飛ばしたんだい」

「何処どこだか、相談が纏まとまらないうちに飛ばしちまったんだ。帽子はいいが、歩行あるくのは厭いやになったよ」

「もういやになったのか。まだあるかないじゃないか」

「あの烟けむりと、この雨を見ると、何ものだか物凄すごくって、あ  
るく元気がなくなるね」

「今から駄々を捏こねちゃ仕方がない。——壮快すげじゃないか。あのむくむく煙の出てくる所は」

「そのむくむくが気味が悪るいんだ」

「冗談云そっちゃ、いけない。あの煙の傍そばへ行くんだよ。

そうして、あの中を覗き込のぞむんだよ」

「考えると全く余計な事だね。そうして覗き込んだ上に飛び込めば世話はない」

「ともかくもあるこう」

「ハハハハともかくもか。君がともかくもと云い出すと、つい釣り込まれるよ。さつきもともかくもで、とうとう饅頭うどんを食っちまった。これで赤痢せきりにでも罹かければ全くともかくもの御蔭だ」

「いいさ、僕が責任を持つから」

「僕の病気の責任を持ったって、仕様がなないじやない

か。僕の代理に病気になれもしまい」

「まあ、いいさ。僕が看病をして、僕が伝染して、本人の君は助ける様にしてやるよ」

「そうか、それじゃ安心だ。まあ、少々あるくかな」

「そら、天気も大分よくなって来たよ。やっぱり天祐があるんだよ」

「難有ありがたい仕合せだ。あるく事はあるくが、今夜は御馳走を食わせなくっちゃ、いやだぜ」

「又御馳走か。あるきさえすればきつと食わせるよ」  
「それから……」



「まだ何か注文があるのかい」

「うん」

「何だい」

「君の経歴を聞かせるか」

「僕の経歴って、君が知ってる通りさ」

「僕が知ってる前のさ。君が豆腐屋の小僧であつた時分から……」

「小僧じゃないぜ、これでも豆腐屋のせがれ伴なんだ」

「その伴の時、寒磬寺かんけいじの鉦かねの音を聞いて、急に金持がにくらしくなつた、因縁話いんえんばなしをさ」

「ハハハハそんなに聞きたければ話すよ。その代り剛健党にならなくちやいけないぜ。君なんざあ、金持の悪党を相手にした事がないから、そんなに呑気のんきなんだ。君はジツキンスの両都物語りと云う本を読んだ事があるか」「ないよ。伊賀いがの水月すいげつは読んだが、ジツキンスは読まない」

「それだから猶貧民なおに同情が薄いんだ。——あの本のねしまいの方に、御医者さんの獄中でかいた日記があるがね。悲惨なものだよ」

「へえ、どんなものだい」

「そりや君、こくくに 仏国の革命の起る前に、貴族が暴威を振つて細民を苦しめた事がかいてあるんだが。——それも今夜僕が寐ねながら話してやろう」

「うん」

「なあに仏国の革命なんてえのも当然の現象さ。あんなに金持ちや貴族が乱暴をすりや、ああなるのは自然の理り窟くつだからね。ほら、あの轟ごうごう々鳴って吹き出すのと同じ事さ」  
と圭さんは立ち留どまって、黒い烟の方を見る。

濛もうもう々と天地を鎖とぎす秋雨しゅううを突き抜いて、百里の底から沸わき騰のぼる濃いものが渦を捲き、渦を捲いて、幾百噸とんの量と

も知れず立ち上がる。その幾百噸の烟りの一分子がことごと悉く震動して爆発するかと思わるる程の音が、遠い遠い奥の方から、濃いものと共に頭の上へ躍り上がって来る。

雨と風のなかに、毛虫の様な眉をあつ攢めて、余念もなく眺めていた、圭さんが、非常な落ち付いた調子で、

「雄大だろう、君」と云った。

「全く雄大だ」と碌さんも真面目で答えた。

「恐ろしい位だ」暫しばらく時をきって、碌さんが付け加えた言葉はこれである。

「僕の精神はあれだよ」と圭さんが云う。

「革命か」

「うん。文明の革命さ」

「文明の革命とは」

「血を流さないのさ」

「刀を使わなければ、何を使うのだい」

圭さんは、何にも云わずに、平手ひらてで、自分の坊主頭を

ぴしゃぴしゃと二返叩いた。

「頭か」

「うん。相手も頭でくるから、こっちも頭で行くんだ」

「相手は誰だい」

「金力や威力で、たよりのない同胞を苦しめる奴等さ」

「うん」

「社会の悪徳を公然商買にしている奴等さ」

「うん」

「商買なら、衣食の為めと云う言い訳も立つ」

「うん」

「社会の悪徳を公然道楽にしている奴等は、どうしても叩きつけなければならん」

「うん」

「君もやれ」

「うん、やる」

圭さんは、のっそりと踵くびすをめぐらした。碌さんは默然もくねんとして尾ついて行く。空にあるものは、烟りと、雨と、風と雲である。地にあるものは青い薄すすきと、女郎花おみなえしと、所々にわびしく交る桔梗ききょうのみである。二人は瑩々けいけいとして無人むにんの境きょうを行く。

薄の高さは、腰を没する程に延びて、左右から、幅、尺足らずの路を蔽おううている。身を横にしても、草に触れずに進む訳には行かぬ。触れば雨に濡れた灰がつく。圭さんも碌さんも、白地の浴衣に、白の股引ももひきに、足袋と

脚絆きやはんだけを紺にして、濡れた薄をがさつかせて行く。腰から下はどぶ鼠の様に染まった。腰から上といえども、降る雨に誘われて着く、よなを、一面に浴びたから、殆んど下水へ落ち込んだと同様の始末である。

只さえ、うねり、くねっている路だから、草がなくつても、何所どこへどう続いているか見極めのつくものではない。草をかぶれば猶更なおよさらである。地に残る馬の足跡さえ、漸ようやく見付けた位だから、あとの始末は無論天に任せて、あるいていると云わねばならぬ。

最初のうちこそ、立ち登る烟りを正面に見て進んだ路



は、いつの間にもやら、折れ曲って、次第に横からよなを受くる様になった。横に眺める噴火口が今度は自然じねんに後ろの方に見えだした時、圭さんはぴたりと足を留とめた。

「どうも路が違う様だね」

「うん」と碌さんは恨めしい顔をして、同じく立ち留どまつた。

「何だか、情ない顔をしているね。苦しいかい」

「実際情けないんだ」

「どこか痛むかい」

「豆が一面に出来て、たまらない」

「困ったな。余よっ程ほど痛いかい。僕の肩へつらまったら、  
どうだね。少しは歩あ行き好るいかも知れない」

「うん」と碌さんは気のない返事をしたまま動かない。

「宿へついたら、僕が面白い話をするよ」

「全体いつ宿へつくんだい」

「五時には湯元へ着く予定なんだが、どうも、あの烟りは妙だよ。右へ行っても、左りへ行っても、鼻の先にあるばかりで、遠くもならなければ、近くもならない」

「上りたてから鼻の先にあるぜ」

「そうさな。もう少しこの路を行って見ようじゃないか」

「うん」

「それとも、少し休むか」

「うん」

「どうも、急に元気がなくなつたね」

「全く饅飩の御蔭だよ」

「ハハハハ。その代り宿へ着くと僕が話しの御馳走をするよ」

「話しも聞きたくなくなつた」

「それじゃ又ビールでない恵<sup>え</sup>比<sup>び</sup>寿<sup>す</sup>でも飲むさ」

「ふふん。この様子じゃ、とても宿へ着けそうもない

ぜ」

「なに、大丈夫だよ」

「だって、もう暗くなつて来たぜ」

「どれ」と圭さんは懐中時計を出す。「四時五分前だ。

暗いのは天気せの所い為だ。然しこう方角が變つて来ると少し困るな。山へ登つてから、もう二三里はあるいたね」

「豆の様子じゃ、十里位あるいてるよ」

「ハハハハ。あの烟りが前に見えたんだが、もうずっと、後ろになつてしまった。すると我々は熊本の方へ二三里近付いた訳かね」

「つまり山からそれだけ遠ざかった訳さ」

「そう云えばそうさ。——君、あの烟りの横の方から又新しい烟が見えだしたぜ。あれが多分、新しい噴火口なんだろう。あのむくむく出る所を見ると、つい、そこにある様だがな。どうして行かれないだろう。何でもこの山のつい裏に違いないんだが、路がないから困る」

「路があつたつて駄目だよ」

「どうも雲だか、烟りだか非常に濃く、頭の上へやってくる。壮さかんなものだ。ねえ、君」

「うん」

「どうだい、こんな凄<sup>すご</sup>い景色はとても、こう云う時でなけりや見られないぜ。うん、非常に黒いものが降って来る。君あたまが大変だ。僕の帽子を貸してやろう。——こう被ってね。それから手拭があるだろう。飛ぶといけないから、上から結わい付けるんだ。——僕がしばつてやろう。——傘は、畳むがいい。どうせ風に逆らうぎりだ。そうして杖<sup>つえ</sup>につくさ。杖が出来ると、少しは歩<sup>あ</sup>りけるだろう」

「少しは歩行きよくなつた。——雨も風も段々強くなる様だね」

「そうさ、さつきは少し晴れそうだったがな。雨や風は大丈夫だが、足は痛むかね」

「痛いさ。登るときは豆が三つばかりだったが、一面になつたんだもの」

「晩にね、僕が、烟草たばこの吸殻を飯粒めしつぶで練って、膏藥こうやくを製つくってやろう」

「宿へつけば、どうでもなるんだが……」

「あるいてるうちが難義か」

「うん」

「困ったな。——どこか高い所へ登ると、人の通る路が

見えるんだがな。——うん、あすこに高い草山が見える  
だろう」

「あの右の方かい」

「ああ。あの上へ登ったら、噴火孔が一と眼に見えるに  
違ない。そうしたら、路が分るよ」

「分るって、あすこへ行くまでに日が暮れてしまうよ」

「待ち給え一寸時計を見るから。四時八分だ。未だ暮れ  
やしない。君ここに待ってい給え。僕が一寸物見をして  
くるから」

「待ってるが、帰りに路が分らなくなると、それこそ



大変だぜ。二人離れ離れになっちまうよ」

「大丈夫だ。どうしたって死ぬ気遣きづかいはないんだ。どうかしたら大きな声を出して呼ぶよ」

「うん。呼んでくれたまえ」

圭さんは雲と烟けむりの這い廻るなかへ、猛然として進んで行く。碌さんは心細くも只一人薄すすきのなかに立って、頼みにする友の後姿うしろすがたを見送っている。しばらくするうちに圭さんの影は草のなかに消えた。

大きな山は五分に一度位きずつ時を限って、普段よりは烈しく轟となる。その折は雨も烟りも一度に揺れて、余

勢が横なぐりに、悄然しょうぜんと立つ碌さんの体軀からだへ突き当る様に思われる。草は眼を走らす限りを尽くしてことごと悉く烟りのなかに靡なびく上を、さあさあと雨が走って行く。草と雨の間を大きな雲が遠慮もなく這い廻わる。碌さんは向うの草山を見詰めながら、顫ふるえている。よなのしずくは、碌さんの下腹したはらまで浸しみ透とおる。

毒々しい黒烟りが長い渦を七巻まいて、むくりと空を突く途端に、碌さんの踏む足の底が、地震の様に撼うごいたと思った。あとは、山鳴りが比較的静まった。すると地面の下の方で、

「おおおい」と呼ぶ声がする。

碌さんは両手を、耳の後ろに宛てた。

「おおおい」

慥たしかに呼んでいる。不思議な事にその声が妙に足の下から湧いて出る。

「おおおい」

碌さんは思わず、声をしるべに、飛び出した。

「おおおい」と癩かんの高い声を、肺の縮む程絞り出すと、太い声が、草の下から、

「おおおい」と応える。圭さんに違ない。

碌さんは胸まで来る薄を無暗むやみに押し分けて、ずんずん声のする方に進んで行く。

「おおおい」

「おおおい。どこだ」

「おおおい。ここだ」

「どこだああ」

「ここだああ。無暗にくるとあぶないぞう。落ちるぞう」

「どこへ落ちたんだああ」

「ここへ落ちたんだああ。気を付けろう」

「気は付けるが、どこへ落ちたんだああ」

「落ちると、足の豆が痛いぞうう」

「大丈夫だああ。どこへ落ちたんだああ」

「ここだあ、もうそれから先へ出るんじゃないよう。おれがそっちへ行くから、そこで待っているんだよう」

圭さんの胴間声どうまごえは地面のなかを通って、段々近づいて来る。

「おい、落ちたよ」

「どこへ落ちたんだい」

「見えないか」

「見えない」

「それじゃ、もう少し前へ出た」

「おや、何だい、こりや」

「草のなかに、こんなものがあるから劔呑だ」

「どうして、こんな谷があるんだろう」

「火熔石かようせきの流れたあとだよ。見給え、なかは茶色で草が一本も生えていない」

「なる程、厄介なものがあるんだね。君、上がれるかい」

「上がれるものか。高さが二間ばかりあるよ」

「弱ったな。どうしよう」

「僕の頭が見えるかい」

「毬栗いかりの片割れが少し見える」

「君ね」

「ええ」

「薄の上へ腹はらばい這になって、顔だけ谷の上へ乗り出して見

給え」

「よし、今顔を出すから待ってい給えよ」

「うん、待ってる、此所ここだよ」と圭さんは蝙蝠傘こうもりで、崖がけの腹をとんとん叩く。碌さんは見当を見計って、ぐしや

りと濡れ薄の上へ腹をつけて恐る恐る首だけを溝みぞの上へ出して、

「おい」

「おい。どうだ。豆は痛むかね」

「豆なんざどうでもいいから、早く上がってくれ給え」

「ハハハハ大丈夫だよ。下の方が風があたらなくって、かえって楽だぜ」

「楽だって、もう日が暮れるよ、早く上がらないと」

「君」

「ええ」



「ハンケチはないか」

「ある。何にするんだい」

「落ちる時に蹴爪けつまづいて生爪なまづめを剥はがした」

「生爪を？　痛むかい」

「少し痛む」

「あるけるかい」

「あるけるとも。ハンケチがあるなら抛なげてくれ給え」

「裂さいてやろうか」

「なに、僕が裂くから丸めて抛げてくれ給え。風で飛ぶと、いけないから、堅く丸めて落すんだよ」

「じくじく濡れてるから、大丈夫だ。飛ぶ気遣はない。いいか、抛げるぜ、そら」

「大分暗くなつて来たね。烟は相変わらず出ているかい」  
「うん。空中一面の烟だ」

「いやに鳴るじゃないか」

「さつきより、烈しくなつた様だ。——ハンケチは裂けるかい」

「うん、裂けたよ。繃帯ほうたいはもう出来上がった」

「大丈夫かい。血が出やしないか」

「足袋の上へ雨と一所ににじんでる」

「痛そうだね」

「なあに、痛いたつて。痛いのは生きてる証拠だ」

「僕は腹が痛くなった」

「濡れた草の上に腹をつけているからだ。もういいから、立ち給え」

「立つと君の顔が見えなくなる」

「困るな。君いつその事に、此所へ飛び込まないか」

「飛び込んで、どうするんだい」

「飛び込めないかい」

「飛び込めない事もないが——飛び込んで、どうするん

だい」

「一所にあるくのさ」

「そうして何所どこへ行く積りだい」

「どうせ、噴火口から山の麓ふもとまで流れた岩のあとなんだから、この穴の中をあるいていたら、どこかへ出るだろう」

「だって」

「だって厭いやか。厭じゃ仕方がない」

「厭じゃないが——それより君が上がれると好いんだがな。君どうかして上がってみないか」

「それじゃ、君はこの穴の縁ふちを伝つって歩ある行くさ。僕は穴の下をあるくから。そうしたら、上下で話わが出来あるからいいだろう」

「縁ふちにや路みちはありやしな

「草くさばかりかい」

「うん。草くさがね……」

「うん」

「胸位むねまで生うえている」

「ともかくも僕は上あがれないよ」

「上あがれないって、それじゃ仕し方がないな——おい。

——おい。——おいって云うのにおい。何故なぜ黙ってるんだ

「ええ」

「大丈夫かい」

「何が」

「口は利けるかい」

「利けるさ」

「それじゃ、何故黙ってるんだ」

「一寸考えていた」

「何を」

「穴から出る工夫をさ」

「全体何だって、そんな所へ落ちたんだい」

「早く君に安心させようと思って、草山ばかり見詰めていたもんだから、つい足元が御留守になって、落ちてしまった」

「それじゃ、僕のために落ちた様なものだ。気の毒だな、どうかして上がって貰えないかな、君」

「そうさな。——なに僕は構わないよ。それよりか。

君、早く立ち給え。そう草で腹を冷やしちや毒だ」

「腹なんかどうでもいいさ」

「痛むんだろう」

「痛む事は痛むさ」

「だから、ともかくも立ち給え。そのうち僕がここで出る工夫を考えて置くから」

「考えたら、呼ぶんだぜ。僕も考えるから」  
「よし」

会話はしばらく途切れる。草の中に立って碌さんが覚<sup>おぼ</sup>束<sup>つか</sup>なく四方を見渡すと、向うの草山へぶつかった黒雲が、峰<sup>みね</sup>の半腹で、どっと崩れて海の様<sup>よう</sup>に濁ったものが頭を去る五六尺の所まで押し寄せてくる。時計はもう五時に近



い。山のなかばは只さえ薄暗くなる時分だ。ひゅうひゅうと絶間なく吹き卸ろす風は、吹く度に、黒い夜を遠い国から持ってくる。刻刻と逼る暮色のなかに、嵐は出まんじに吹きすさむ。噴火孔から吹き出す幾万斛いくまんこくの烟りは出まんじのなかに万遍まんべんなく捲き込まれて、嵐の世界を尽くして、どす黒く漲みなぎり渡る。

「おい。居るか」

「居る。何か考え付いたかい」

「いいや。山の模様はどうだい」

「段々荒れるばかりだよ」

「今日は何日いくかだっけかね」

「今日は九月二日さ」

「ことによると二百十日かも知れないね」

会話は又切れる。二百十日の風と雨と烟りは満目まんもくの草を埋めうず尽くして、一丁先は靡なびく姿さえ、判然はきと見えぬ様になつた。

「もう日が暮れるよ。おい。居るかい」

谷の中の人は二百十日の風に吹き浚さらわれたものか、うんとも、すんとも返事がない。阿蘇の御山は割れるばかりにごうごうと鳴る。

碌さんは青くなつて、又草の上へ棒の様に腹這になつた。

「おおおい。居おらんのか」

「おおおい。こつちだ」

薄暗い谷底を半町ばかり登った所に、ぼんやりと白い者が動いている。手招きをしているらしい。

「なぜ、そんな所へ行つたんだああ」

「ここから上がるんだああ」

「上がれるのかああ」

「上がれるから、早く来おい」

碌さんは腹の痛いのも、足の豆も忘れて、脱兎だつとの勢いきおいで飛び出した。

「おい。ここいらか」

「そこだ。そこへ、一寸、首を出してみてくれ」

「こうか。——成程なるほど、こりや大變浅い。これなら、僕が蝙蝠傘こうもりを上から出したら、それへ、取っ捕つからまって上されるだろう」

「傘だけじゃ駄目だ。君、気の毒だがね」

「うん。ちつとも気の毒じゃない。どうするんだ」

「兵児帯へこおびを解いて、その先を傘の柄えへ結びつけて——君

の傘の柄は曲ってるだろう」

「曲ってるとも。大いに曲ってる」

「その曲ってる方へ結びつけてくれないか」

「結びつけるとも。すぐ結びつけてやる」

「結び付けたら、その帯の端はじを上からぶら下げてくれ給え」

「ぶら下げるとも。訳はない。大丈夫だから待っていたまえ。——そうら、長いのが天竺から、ぶら下がったろう」

「君、しっかり傘を握っていなくっちゃいけないぜ。僕

の身体からだは十七貫六百目あるんだから」

「何貫目あったって大丈夫だ、安心して上がり給え」

「いいかい」

「いいとも」

「そら上がるぜ。——いや、いけない。そう、ずり下がって来ては……」

「今度は大丈夫だ。今のは試してみただけだ。さあ上がった。大丈夫だよ」

「君が滑べると、二人共落ちてしまおうぜ」

「だから大丈夫だよ。今のは傘の持ち様が変わるかったん

だ」

「君、薄の根へ足をかけて持ち応えていたまえ。——あんまり前の方で踏<sup>ふ</sup>ん張ると、崖<sup>がけ</sup>が崩れて、足が滑べるよ」  
「よし、大丈夫。さあ上がった」

「足を踏ん張ったかい。どうも今度もあぶない様だな」

「おい」

「何だい」

「君は僕が力がないと思って、大<sup>おお</sup>に心配するがね」

「うん」

「僕だって一人前の人間だよ」

「無論さ」

「無論なら安心して、僕に信頼したらよかろう。からだは小さいが、朋友ほうゆうを一人谷底から救い出す位の事は出来る積りだ」

「じゃ上がるよ。そらっ……」

「そらっ……もう少しだ」

豆で一面に腫はれ上がった両足を、うんと薄の根に踏ん張った碌さんは、素肌を二百十日の雨に曝さらしたまま、海老えびの様に腰を曲げて、一生懸命に、傘の柄にかじり付いている。麦藁帽子むぎわらぼうしを手拭いで縛りつけた頭の下から、真赤



にいきんだ顔が、八分通り阿蘇卸ろしに吹きつけられて、喰い締めた反そつ齒ばの上にはよなが容赦なく降つてくる。

毛け繻じゆ子す張ばり八間はちけんの蝙蝠こうもりの柄には、幸い太い瘤こぶだらけの

頑丈な自然木しねんぼくが、付けてあるから、折れる氣遣は先まずあ

るまい。その自然木の彎曲わんきよくした一端いったんに、鳴海なるみ絞しばりの兵

児帯が、薩摩の強弓ごうきゆうに新しく張った弦ゆみづるの如くぴんと

薄を押し分けて、先は谷の中にかくれている。その隠れ

ているあたりから、しばらくすると大きな毬栗頭いがぐりあたまがぬ

っと現われた。

やっと云う掛声と共に両手が崖の縁にかかるが早い

か、大入道の腰から上は、斜めに尻に插さした蝙蝠傘こうもりと共に谷から上へ出た。同時に碌さんは、どさんと仰あおむ向きになつて、薄の底に倒れた。

## 五

「おい、もう飯めしだ、起きないか」

「うん。起きないよ」

「腹の痛いのは癒なおったかい」

「まあ大抵癒った様なものだが、この様子じゃ、いつ痛

くなるかも知れないね。ともかくも饅頭うどんが崇たたったんだから、容易には癒りそうもない」

「その位口が利ければ慥たしかなものだ。どうだいこれから出掛けようじゃないか」

「どこへ」

「阿蘇へさ」

「阿蘇へまだ行く気かい」

「無論さ、阿蘇へ行く積りで、出掛けたんだもの。行かない訳には行かない」

「そんなものかな。然しこの豆じゃ残念ながら致し方が

ない」

「豆は痛むかね」

「痛むの何のつて、こうして寐ねていても頭へずうんずうんと響くよ」

「あんなに吸殻をつけてやったが、毫ごうも利目ききめがないかな」

「吸殻で利目があつちや大変だよ」

「だって、付けてやる時は大いに難有ありがたそうだったぜ」

「癒ると思つたからさ」

「時に君はきのう怒つたね」

「いつ」

「裸で蝙蝠傘こうもりを引つ張るときささ」

「だって、あんまり人を軽蔑けいべつするからさ」

「ハハハ然し御蔭で谷から出られたよ。君が怒らなければ

僕は今頃谷底で往生おうじようしてしまつたかも知れない所だ」

「豆を潰つぶすのも構わずに引つ張つた上に、裸で薄の中へ

倒れてさ。それで君は難有ありがたいとも何とも云わなかつたぜ。

君は人情のない男だ」

「その代りこの宿まで担かついで来てやつたじゃないか」

「担いでくるものか。僕は独立して歩行あるいて来たんだ」

「それじゃ此所ここはどこだか知ってるかい」

「大おおに人を愚弄したものだ。ここはどこだって、阿蘇町さ。然もともかくもの饅飩を強いられた三軒置いて隣の馬車宿だあね。半日山のなかを馳けあるいて、漸ようやく下りてみたら元の所だなんて、全体何てえ間拔だろう。

これからもう君の天祐てんゆうは信用しないよ」

「二百十日だったから悪るかった」

「そうして山の中で芝居染じみた事を云ってさ」

「ハハハハ然しあの時は大いに感服して、うん、うん、て云った様だぜ」

「あの時は感心もしたが、こうなってみると馬鹿氣ていらあ。君ありや真面目かい」

「ふふん」

「冗談か」

「どっちだと思う」

「どっちでも好いが、真面目なら忠告したいね」

「あの時僕の経歴談を聴かせろって、泣いたのは誰だい」

「泣きやしないやね。足が痛くって心細くなったんだね」

「だって、今日は朝から非常に元気じゃないか、昨日た別人の観がある」

「足の痛いに関わらずか。ハハハハ。実はあんまり馬鹿気ているから、少し腹を立ててみたのさ」

「僕に対してかい」

「だって外に対するものがないから仕方がないさ」

「いい迷惑だ。時に君は粥かゆを食うなら誂あつらえてやろうか」

「粥もだがだね。第一、馬車は何時に出るか聞いて貰いたい」



「馬車でどこへ行く気だい」

「どこって熊本さ」

「帰るのかい」

「帰らなくってどうする。こんな所に馬車馬と同居していちや命が持たない。ゆうべ、あの枕元でぽんぽん羽目を蹴けられたには実に弱ったぜ」

「そうか、僕はちつとも知らなかった。そんなに音がしたかね」

「あの音が耳に入らなければ全く剛健党に相違ない。どうも君は憎くらしい程善く寐る男だね。僕にあれ程堅い

約束をして、経歴談をきかせるの、医者者の日記を話すの  
って、いざとなると、まるで正体なしに寐ちまうんだ。

——そうして、非常ないびきをかいて——」

「そうか、そりゃ失敬した。あんまり疲れ過ぎたんだ  
よ」

「時に天気はどうだい」

「上天気だ」

「くだらない天気だ、昨日晴ればいい事を。——そう  
して顔は洗ったのかい」

「顔はとうに洗った。ともかくも起きないか」

「起きるって、只は起きられないよ。裸で寐ているんだから」

「僕は裸で起きた」

「乱暴だね。いかに豆腐屋育ちだって、あんまりだ」

「裏へ出て、冷水浴をしていたら、かみさんが着物を持って来てくれた。乾いてるよ。只鼠色になってるばかりだ」

「乾いてるなら、取り寄せてやろう」と碌さんは、いきおい勢よく、手をぽんぽんたた敲く。台所の方で返事がある。男の声だ。

「ありや御者かね」

「亭主かも知れないさ」

「そうかな、寐ながら占ってやろう」

「占ってどうするんだい」

「占って君と賭かけをする」

「僕はそんな事はしないよ」

「まあ、御者か、亭主か」

「どっちなあ」

「さあ、早く極きめた。そら、来るからさ」

「じゃ、亭主にでもして置こう」

「じゃ君が亭主に、僕が御者だぜ。負けた方が今日いちんち一日命令に服するんだぜ」

「そんな事は極めやしない」

「御早おはよう……御呼びになりましたか」

「うん呼んだ。ちよつと僕の着物を持って来てくれ。乾いてるだろうね」

「ねえ」

「それから腹がわるいんだから、粥を焚たいて貰たいたい」

「ねえ。御二人さんとも……」

「おれは只の飯で沢山だよ」

「では御一人さんだけ」

「そうだ。それから馬車は何時と何時に出るかね」

「熊本通いは八時と一時に出ますたい」

「それじゃ、その八時で立つ事にするからね」

「ねえ」

「君、いよいよ熊本へ帰るのかい。折角せっかく此所ここまで来て阿

蘇のぼへ上らないのは詰らないじゃないか」

「そりや、いけないよ」

「だって折角来たのに」

「折角は君の命令によ困って、折角来たに相違ないんだが

ね。この豆じゃ、どうにも、こうにも、——天祐を空むなしくするより外に道はあるまいよ」

「足が痛めば仕方がないが、——惜しいなあ、折角思い立って、——いい天気だぜ、見給え」

「だから、君も一所に帰り給えな。折角一所に来たものだから、一所に帰らないのは可笑おかしいよ」

「然し阿蘇へ登りに来たんだから、登らないで帰っちあ済まない」

「誰に済まないんだ」

「僕の主義に済まない」

「又主義か。窮屈な主義だね。じゃ一度熊本へ帰って又出直してくるさ」

「出直して来ちや気が済まない」

「色々なものに済まないんだね。君は元来強情過ぎるよ」

「それでもないさ」

「だって、今まで只の一遍でも僕の云う事を聞いた事がないぜ」

「幾度もあるよ」

「なに一度もない」



「昨日も聞いてるじゃないか。谷から上がってから、僕が登ろうと主張したのを、君が何でも下りようと云うから、此所まで引き返したじゃないか」

「昨日は格別さ。二百十日だもの。その代り僕は饅頭を何遍も喰ってるじゃないか」

「ハハハハ、ともかくも……」

「まあいいよ。談判はあとにして、ここに宿の人が待ってるから……」

「そうか」

「おい、君」

「ええ」

「君じゃない。君さ、おい宿の先生」

「ねえ」

「君は御者かい」

「いいえ」

「じゃ御亭主かい」

「いいえ」

「じゃ何だい」

「雇<sup>やといにん</sup>人で……」

「おやおや。それじゃ何にもならない。君、この男は御

者でも亭主でもないんだとさ」

「うん、それがどうしたんだ」

「どうしたんだって——まあ好いや、それじゃ。いいよ、君、彼方あっちへ行っても好いよ」

「ねえ。では御二人さんとも馬車で御越しになりますか」

「そこが今悶着もんちやく中さ」

「へへへへ。八時の馬車はもう直ぐ、支度したくが出来ます」

「うん、だから、八時前に悶着を方付かたづけて置こう。一と先ず引き取ってくれ」

「へへへへ御緩ごゆつくり」

「おい、行つてしまった」

「行くのは当り前さ。君が行け行けと催促するからさ」

「ハハハありや御者でも亭主でもないんだとさ。弱つたな」

「何が弱つたんだい」

「何がって。僕はこう思つてたのさ。あの男が御者ですと云うだろう。すると僕が賭に勝つ訳になるから、君は何でも僕の命令に服さなければなくなる」

「なるものか、そんな約束はしやしない」

「なに、したと見倣みなすんだね」

「勝手にかい」

「曖昧あいまいにさ。そこで君は僕と一所に熊本へ帰らなくつちあ、ならないと云う訳さ」

「そんな訳になるかね」

「なると思つて喜こんでたが、雇人だつて云うから仕様ががない」

「そりや当人が雇人だと主張するんだから仕方がないだろう」

「もし御者ですと云つたら、僕は彼奴あいつに三十銭やる積だ

「ったのに馬鹿な奴だ」

「何にも世話にならないのに三十銭やる必要はない」

「だって君は一昨夜、あの束髪そくはつの下女に二十銭やったじやないか」

「よく知ってるね。——あの下女は単純で気に入ったんだもの。華族や金持ちより尊敬すべき資格がある」

「そら出た。華族や金持ちの出ない日はないね」

「いや、日に何遍云っても云い足りない位、毒々しくつて凶迂ずうずう々々しい者だよ」

「君がかい」

「なあに、華族や金持ちがさ」

「そうかな」

「例えば今日わるい事をするぜ。それが成功しない」

「成功しないのは当たり前だ」

「すると、同じ様なわるい事を明日やる。それでも成功しない。すると、明後日になって、又同じ事をやる。成功するまでは毎日々々同じ事をやる。三百六十五日でも七百五十日でも、わるい事を同じ様に重ねて行く。重ねてさえ行けば、わるい事が、ひっくり返って、いい事になると思ってる。言語道断だ」

「言語道断だ」

「そんなものを成功させたら、社会はめちやくちやだ。おいそうだろう」

「社会はめちやくちやだ」

「我々が世の中に生活している第一の目的は、こう云う文明の怪獣を打ち殺して、金も力もない、平民に幾分でも安慰を与えるのにあるだろう」

「ある。うん。あるよ」

「あると思うなら、僕と一所にやれ」

「うん。やる」



「きつとやるだろうね。いいか」

「きつとやる」

「そこでともかくも阿蘇へ登ろう」

「うん、ともかくも阿蘇へ登るがよかろう」

二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々ごうごうと百年の不  
平を限りなき碧空へきくうに吐き出している。



日本文学電子図書館

---

二百十日・野分

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

---

夏目漱石

二百十日

